

言葉の橋

みやじ
宮地
ゆたか
裕

冬は

たかみ
高見
じゆん
順

冬は

手から冷える時と

足から冷える時とがある

悲しみは

いつも真っすぐ心に来る

冬、仕事をしていると、知らないうちに手先が冷たくなっていることがある。時にはまた、知らないうちに足先がこごえていることもある。身にこたえる冷えだけでも、心にまで冷えを覚えているわけではない。しかし、「悲しみ」というものは、後先もなく、いつもまっすぐ心の真ん中に強くしみこむ。

初めの三行と、後の二行とがひびき合って、「悲しみ」の思いが人を打ちます。この作品は、どんな悲しみなのか、なんの悲しみなのか、それにはひと言もふれないで、きりきりと胸にせまる「悲しみ」を、さりげない言葉で言い切っている、とわたしは感じます。

言葉は、人の心と心を結ぶ橋のようなものです。だから、もしすべての言葉がこのようにまっすぐでしっかりした橋だったなら、わたしたちは言葉によって自分の心をそのまま人に伝えることができ、人の心をそのままはつきり知ることができるでしょう。しかし、言葉は、時としてにじのように美しく消えていくこともあるし、山おくの一本橋のようにわたりにくいこともあるのです。